

愛

媛大学工学部の電子工学科、情報工学科で35年強の教官・教員生活を送ってきた。この間、文書作成も、論文執筆用と教育用→諸プロジェクトの申請書や大学の管理運営用→定年退職後に設立した大学発のIT系ベンチャー企業「(株)愛媛キャンパス情報サービス」(略称:e-CIS)の企画書や見積・請求書あるいは株主総会用と変わってきた。久しぶりに会誌に執筆させていただくことになり、どれだけ“好き放題”にできるか気にかけている。

大学教員の役割は「教育・研究」であると言われてきて、現在では、さらに地域貢献や管理運営が加わっている。私は、大学教員であることの意味は、あくまで研究者で、**創る**喜びを持ち、研究を通じて世界と渡り合うことだと思っている。大学院時代(理論物理)に“論文は最低年1本以上で中途半端なものを書くな。日本語のものは論文と思うな”と教えられていたが、情報工学でも同じと思っている。研究面での**創る**楽しみを味わいながら学生に接すると、細かいことをあれこれ言わなくても、学生の方が自然にこちらの姿勢を自分の態度に反映してくれる。これで、毎年のように、色々な分野で頑張る卒業生を送り出すことができた。「研究より教育が大切だ」とか「日本語論文こそ重要」などという「先生」のところからは、優秀な学生は育たないように思う。地方大学である愛媛大学には、入学前の高校時代の受験勉強や偏差値教育で頭をすり減らしていない学生も多い。彼らは、少し後押しするだけで**創る**楽しみを共有してくれる。そういう能力を秘めた学生が卒業研究で、私の分野を志望してくれたのも助かった。工学部にいたこともあり、いわゆる産・官とも、大学教員としての主体性を保ちつつ良好な関係を持つことができた。その意味では、本来の大学教員の使命をなんとか達成できたのではと自負している。

野田松太郎 Matu-Tarow NODA

(株)愛媛キャンパス情報サービス

[正会員] noda@ecis.co.jp

大阪市立大学大学院修了(理学博士)。愛媛大学工学部を定年退職後起業し現職。愛媛大学評議員・総合情報メディアセンター長、日本数式処理学会会長等歴任。

情報工学科では、私の研究テーマが数式処理アルゴリズムなので、大変気にしたことがある。研究者養成を目指す大学でなら問題はないが、高度技術者育成が主眼である地方大学の工学部や研究科では、“役に立つ”テーマを学生に与えなければいけない。講義も抽象的ではなく、現実的・実践的であることが重要だ。結局は、修士論文のテーマなども、ごく一部の学生には、私の専門に近いことをやってもらったが、ほかには、上にも述べた“研究者の視点”でのアドバイスを送ることに終始した。一見難しそうな使

基
般

[シニアコラム]

IT好き放題



[No.15]

創る

い分けだったが、慣れると、そう苦痛でもなくなり、学生の特質を早く見つけることの方の楽しみが増えた。一方で、儀礼的なインターンシップではなく、学生に真にシステム作成等の実学体験の機会を与えられないかと模索したが、そう容易ではなかった。

定年退職後に、当時の愛媛大学長の支援もあり、実学体験の場の設立をした。それが、上記e-CISである。ここでは、情報系の大学院生や学生を開発要員として、IT系のシステム作成やWebサイト作成、e-ラーニング関連等をしており、主に愛媛大学内の各部局等からの発注を受けている。一般のシステム会社と違い、「大学の内部を熟知した設計、発注者が満足するまでのシステム更新、驚異的低価格」で、大学には大きな意味を持っていると思っている。アルバイト的に働く学生にはプログラム作成からプロジェクト・リーダーまで経験させるが、講義とは異なり、コンピュータシステムやネットワーク、Webやプログラミング言語、データベース、ユーザインタフェースあるいはマニュアル執筆等の実学体験をさせている。彼らが、次世代を指導する高度IT技術者に成長してくれることを夢見ている。「人創り」は面白く楽しいものだ。

(2011年11月23日受付)